

## 1. 私とキノコ

キノコというと、木の根元でひっそりと生えているというイメージがある。マツタケやトリュフなど高級食材になるものもあるが、一般的にはシイタケやシメジといった手頃な価格のキノコ類が身近なものといえる。シイタケは干して保存のきく食材になる。地味が目立たなくても、私達人間の食卓を豊かにしてくれている。

私にとってキノコ類は大切な食材である。特になめこの味噌汁は、私の心を癒してくれる重要なひと品である。疲れたとき、落ち込んだ時、一杯のなめこの味噌汁が次への活力を与えてくれる。もうひとつの好物のキノコはキクラゲである。キクラゲのこりこりとしたあの食感が好きでたまらないのである。五目焼きそばや炒め物などにあの黒いキクラゲが入っていると思わず笑顔になってしまう。

ところが、東日本大震災に伴う福島原発事故によって、キノコ類の安全性が危ぶまれることになってしまった。この震災後、キノコ類、牧草を食べる動物、茶、ベリー類がチェルノブイリ原発の事故後特にセシウムの濃度が高くなり、食用に不適になったという話を耳にした。これを知った私がまず考えたことは、「わたしの命の糧のなめこは食べても大丈夫なのか？」ということだった。不安を抱えつつ、時折大きく育った「やまなめ」を買い求め、味噌汁にして食べていた。

そうして震災から1年以上が過ぎ、本コンクールの課題図書として『キノコの教え』と出会った。これはもう読むしかない、と応募を決めたのである。

## 2. 『キノコの教え』を読んで考えたこと

### 1) キノコ観の変化

そのような経緯で『キノコの教え』を読み始めた。「1 日陰者のつぶやき」から、キノコが植物とも、もちろん動物とも別個の、独立した存在だということを知った。多くの人々の例に漏れず私もキノコは漠然と植物の仲間だと考えていたので、この世は動物と植物だけではないのだということを知り、世界観が変わる思いがした。キノコは身近でありふれた存在だと思ってきたが、なかなか奥深い謎の生き物なのだということを知った。

### 2) キノコは人間の活動に警鐘を鳴らしている

著者はキノコ研究に関連して知りえた森林の変化についても述べ、森林が秋に紅葉しない様子や、キノコが年によって凶豊作が極端な状況を報告している(6 環境異変を告げるキノコ)。これらはどうやら地球温暖化の影響と大陸からの汚染物質が原因らしい。環境問題は一国のみの問題ではない。工業製品の生産には環境問題が付き物である。海外でも、国を超えた環境汚染が問題になっている。酸性雨やチェルノブイリ原発事故による影響はその一例であるといえよう。そうした荒れた森林には、キノコは見当たらなくなるそうだ。キノコはある意味身をもって自然環境の悪化を告げているのだろう。キノコといえば味はどうか、毒はないかといったこと位しか気にしたことがなかったのだが、小さな体で人間

に鋭い警告を発しているように思えてならない。森林のこうした姿を知って連想したのは、宮崎駿の作品『風の谷のナウシカ』である。主人公ナウシカはユパに、腐海は毒を浄化している、と告げる場面がある。案外これは自然のあり方を的確に描いているのではないだろうか。自然は人間の排出した有毒物質を、長い時間をかけて癒しているのかもしれない。人類がたとえ環境汚染の結果減ってしまったとしても、自然は長い時間をかけて自らを癒そうとするのだろう。著者は「放射能で死ぬか、化石燃料の浪費で死ぬか、どちらをとりますか」（156ページ）と問いかけているとのことだが、大きな自然の力に比べて、私達人間の持った科学の力には限りがあることに気付くべきときにきているのではないだろうか。

### 3) キノコの生き方から学ぶー共生とはなにかー

キノコは樹木に寄生して栄養を得ているということを本書から学んだ。キノコは木々を支えることで生きている。樹木とキノコは正に一心同体、持ちつ持たれつ、関係を築いている。キノコが生きられなくなれば木も生きてはいけない。動物が弱肉強食の原理の下で生存競争をしていることがなんとも浅ましいことに思える。ただ、競争は植物の間でもある。より環境に適応した種が生き残るのは自然の摂理であり、動物も植物もこれから逃れることはできない。キノコの賢いところは、宿主を生かすことで生存していることだ。宿主を食い尽くすのではなく、栄養源である宿主と折り合いをつけ、お互いが生き残れるようにしている。「哺乳類の中でも人類はシロアリと並んで、かなり共生状態に近づいた生き物である。」（219ページ）という。であるならば、これからの人類は、自然との折り合いのつけ方を、キノコの生き方から学ぶことで、平和に生きていく知恵を生み出していくことが、これからの課題である。

### 4) キノコと人間の食のあり方

私の好物がなめことキクラゲであることは先に述べたが、キノコは人間を食育してくれているように思えてならない。「どの国でもキノコは経済成長の指標」（81ページ）であり、「食べ物の質はでんぷん食からたんぱく質や油脂の多い食事」（82ページ）に変化する様子は、キノコ類がヒトの体にとってなにが必要なのかを伝えている。結局は、カロリーの低い、食物繊維を中心とした粗食が、ヒトを健康で長生きさせることを教えてくれている。

### 5) 身近な松と海

私は神奈川県海沿いで生まれ育ち、現在も海岸沿いに松林が植えてある光景を身近なものとして生活している。ところが、海岸沿いを通りはしても、一度も松林の中に入ったことはない。「クロマツを植える」（169ページ）では湘南海岸の松林でキノコの調査をしていることが述べられている。まさかあの松林でキノコが生きていて、しかも食用できる種がいるとは思わず、大変驚いた。「砂浜にクロマツを植えるのはかなり難しい」（169ページ）ということにも驚いた。松と海は相性がいいのかと漠然と思っていたのだが、先人が知恵を絞って松林を守り育ててきたのだということを知り、海岸沿いの松林を見直

した。私の住んでいる地域は大地震による津波が発生すれば津波が高い位置で到達すると予想されている。東日本大震災では高田松原の松林が大きな被害を受けた。松林だけではなく、人的被害も大きかったとのことである（「消えた高田松原の再生」）。「ねじ切られた老木を見ると。それでもある程度は波の力を抑えるのに役立っていたように思える。」（180ページ）と著者は述べている。もし松林が津波の被害を弱めてくれるのなら、私たちは積極的に海沿いの松林を保護していくことが防災の一環として必要である。そして、その松の根元にはキノコたちが松を守っていることにも思いを馳せたい。

#### 6) これからの私たちの生き方

東日本大震災は私達日本人の生き方を問いかける契機となった。特に、エネルギー、電気の使い方に関心を寄せざるを得ない状況になった。原子力発電所への依存の可否を私たちは選択しなくてはならなくなったのだ。反原発のデモが時折報道されている。地元でも反原発デモのポスターが貼ってあることがあり、実際のデモを見かけたこともある。

東日本大震災以前から、LED電球や省エネ型の家電が出回り、広告でも省電力は呼びかけられていた。だが、この震災による計画停電の経験は電力が無限ではないことを私たちに教えた。空気や太陽光、水といった自然の資源と異なり、電力は人工のエネルギーであり、限りがある。私達の生活を便利にしてくれる電力は、環境に大きな負荷をかけた上で得ていることを改めて考えなくてはならない。

『キノコの教え』で著者が述べていることは、「共生」である。キノコは木々と共生している。ひとつの種だけが繁栄しているのではなく、複数の種が折り合いをつけて生き残っていきこうとしている。私達人間も、他の生き物達と折り合いをつけていく方法を見つけなければ、将来生き残っていけなくなってしまうのではないか。近年少子高齢化が問題となっているが、自然に寄り添う生き方を見つけることが解決へのひとつの鍵となるかもしれない。人間の生物としての側面に注目し、自然の中で生きていくという視点から環境を考えられるようになりたい。

おわりに

本書は実に時宜を得て出版されたと思う。日ごろ目立たない存在のキノコ達が、実は環境の変化を告げていることを学ぶことができた。東日本大震災を私達日本人が生き方を振り返り、自然と共生できるような社会を作る機会として捉え、これからどう生きていくかを考えていかななくてはならない。本書との出会いに感謝する。